

Esri User Conference 2019

東京大学大学院 堤 遼 / The University of Tokyo, Ryo TSUTSUMI

この体験記は、筆者の修士論文研究「経験抽出法に基づく音環境体験の時空間的記述に関する研究」が Esri Young Scholars Award 最優秀賞に選出され、日本の学生代表として招待して頂いた Esri User Conference 2019 での体験を報告するものです。

01. はじめに

この度、幸運にも Esri Young Scholars Award の最優秀に選出して頂き、光栄なことに日本の学生代表として世界中の GIS に関わる研究者・企業・団体が集う Esri User Conference(UC) に招待して頂きました。未熟な私には身に余る素晴らしい学びと成長の機会を与えて下さった Esri 社と Esri ジャパンの皆様に、深く感謝しております。そして今回私が体験した UC について、ここに綴っていきたいと思います。

「UC= 世界最大規模の GIS の祭典」

まず UC とは、1997 年から毎年開催される米国 Esri 社が開催する世界最大規模の GIS に関する国際会議です。Esri 社はアメリカ合衆国のカリフォルニア州レッドランズ市を拠点としており、そのレッドランズから南へ 150km 下ったサンディエゴにて毎年開催開催されます。世界

中から研究者・企業・団体など様々なバッケージラウンドを持った GIS ユーザーが集い、今年は 17,086 人の参加者、26,652 人のライブストリーム視聴者が参加しました。この規模でプレセレモニーを含めて 7 日間も期間開催され、非常に多くの人々の交流が行われるとても刺激的で素晴らしい体験の場となりました。

02. 会場

UC のメイン会場となっていたのは、San Diego Convention Center でした。ここは UBC 人類学博物館を設計したカナダの建築家アーサー・エリクソンによるデザインで、総床面積 240,000 m²、展示スペースだけで 57,200 m²もある展示施設となっています。円形のガラスのアーチが水平に広がり、それを覆うように並ぶバットレスの三角形が印象的で、外観も内観も人の目を引くため、多くの人が SNS に写真をあげていました。

また隣接する Hilton、Marriott、Grand Hyatt の 5 つ星ホテルまでも会場となっていました。これらの会場は、セッション自体よりも主にセッション前後に開かれるパーティ会場として使われていました。

03. Plenary Session

今年の UC も、創業者 Jack Dangermond 氏の基調講演から始まりました。巨大なスクリーンがいくつも並び、何台ものカメラが Jack 氏を捉え、スクリーンに映し出される。講演が始まるころにはあればど広大に見えた会場が参加者で埋まり、そこにいる全員が氏の言葉に耳を傾けていました。

「See What Others Can't」

私たち自身が目を見開き、他の人には見えない物を見て欲しいという思いが込められ、Esri のポスター や HP、至る所にこの言葉が





Plenary Session の様子

記されていました。

また Jack 氏は、GIS を人間の神経系に喻え、様々な社会の問題に対する取り組みについて紹介していました。象の密猟、水の問題、地雷除去、自然災害などの問題解決から商業的な利用まで、あらゆる問題に対して、組織や人々を繋げ、まるで社会の神経系となるのだと、Jack 氏はおっしゃっていました。

「GIS と建築」

今回私が UC に参加して、一番の可能性と興味を感じたのもその点にあります。私は、建築学科出身で、今は建築に携わるシンクタンクに所属しています。

GIS が多く題材としてきた都市と私が専門してきた建築は、非常に密接な関係にあり、これまで様々な視点で議論されてきました。そして今現在様々なところで個別に多くのデジタル情報が生まれ、リアルな空間に加えてデジタルな空間（データ）が形成されています。

そこで、それらのデータ同士またはリアルとデジタルとを integrate し、新たな関係性を築こうとした時、GIS は非常に強力なツールとして、あるいはプラットフォームとして機能するに違いない、まさに GIS が社会の神経系になる可能性を備えているのだと、今回の体験を通して実感しています。



創業者 Jack 氏と各国の Young Scholars Award 受賞者

04. 授賞式と研究発表

3 日 目 の 夕 方 に は、SAG 賞 (Special Achievement in GIS Award) と YSA 賞 (Esri Young Scholars Award) の授賞式がありました。SAG 賞とは、GIS の活用によってコミュニティや社会の変革に貢献したと認められる企業や政府機関、自治体、教育・研究機関に贈られる賞で、日本からは大和ハウスグループの総合建設業フジタ様が受

賞されました。

授賞式後には、各国の YSA 受賞者との記念撮影や立食パーティが行われ、それぞれの母国や研究、旅、興味についての会話を通じて交流を深めました。

「他分野との交流」

受賞した内容でポスター発表を行いましたが、その会場には数多くの団体が展示をしており、その分野の多様さ、そして視点の違い、アプローチの仕方、表現の方法、各々が備えるバックグラウンドと、自分の中にある知識や考え、経験とは全く異なるものばかりで、非常に新鮮で興味深いものばかりでした。普段の日本で参加する学会や研究会とはまた違う学びのある場だったと思います。

05. セッションと交流

オーラルセッションやハンズオンセミナー、デモンストレーション、企業展示など GIS に関する様々な最新のアイデアに触れることができ非常に有意義な時間を過ごすことができました。

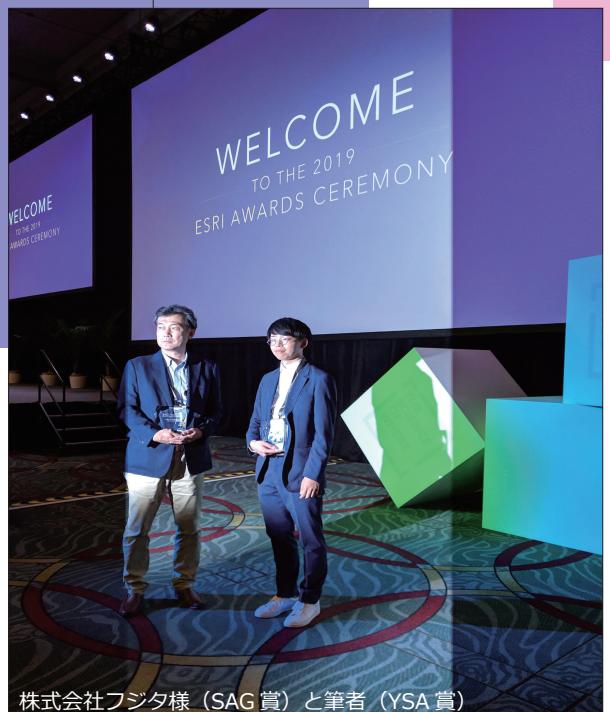
「1000+ Sessions」

このカンファレンスでのセッションの数は 1000 以上あったそうです。7 日間のスケジュール一覧を印刷しようと pdf 化すると 500 ページ以上あり、あまりのセッション数にはじめは途方にくれました。

しかし、Esri は Survey123 for ArcGIS 等のスマートフォンアプリを公開しており、今回も Esri のイベント専用アプリ「Esri Events」を使うと非常にスケジュール管理が便利になりました。またアプリの UX のクオリティにも感心してしまいました。

「ブランディング」

今回 UC に参加して日本との違いを強く感



株式会社フジタ様 (SAG 賞) と筆者 (YSA 賞)

じた内のひとつが、ブランドへの意識の高さでした。チケットやリーフレット、アブリ、発表スライド、会場デザインなど、どこに対しても自らのブランドへの意識が形となって現れていました。

ただ細かいところにお金をかけているのではなく、こういった部分からこれから訪れるであろう巨大なデジタル市場でオンラインになろうとする Esri 社の力強さを、私個人的には強く感じました。

「貴重な出会い」

意見交換は他国の人たちだけでなく、Esri ジャパンの方々、UC に展示や発表、学びにいらっしゃった日本の企業・研究機関などの方々とも様々なお話をさせて頂きました。セッションの内容について、自らの研究や業務について、今の自分が描いている将来に関する議論など、未熟な自分の考えにも深い知見と経験からアドバイスや意見を頂けたことは、非常に貴重な交流の場であつたと確信しています。

06. Party at Balboa

今年は Esri50 周年という節目の年で、最終日の前夜には盛大なパーティーがありました。全米一のサンディエゴ動物園を筆頭に約 30 の施設を含む約 4.9k m² の広大なバルボアパークを貸し切って開催されました。

肉を食べお酒を飲みながら美術館を見放題、博物館の中ではティラノサウルスの前で DJ がディスクを回す、広場ではラップバトルにバイオリンにテクノと、こんな大規模でこんな自由なパーティーがあるのかと、ひたすら圧倒されながら楽しんできました。

07. おわりに

この UC 期間中は朝早くから夜中まで、様々な形で GIS やこれからの社会について考え、学ぶことができ、予想していた以上に密度の濃い日々を過ごさせて頂きました。

様々な物事が繋がり、複雑にかつ曖昧になつてきている中、その繋げ方やどのような将来を描いてゆくべきか、そして今何ができるのかを考え、語り、UC を通して自分の視野の広がりと深化を実感しています。

改めて、今回の受賞と UC 参加に際してお世話になりました米国 Esri 社、Esri ジャパンの皆様、UC 参加を快諾して下さった日建設計、日建設計総合研究所の皆様に、心から感謝申し上げます。



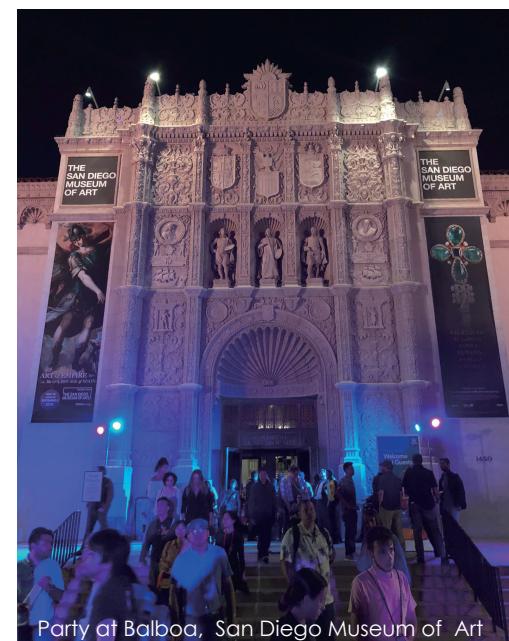
トロフィーと筆者とサンディエゴ湾



Party at Balboa, Patio



Party at Balboa, Main Stage



Party at Balboa, San Diego Museum of Art



サンディエゴ動物園にて